

小・中学生のキャンプ体験に関する研究（第2報）

—新潟大学公開講座の事例から—

大 橋 正 春*・長 井 健 二**・高 橋 健 一***

1. はじめに

平成13年度より新潟大学教育人間科学部の公開講座として、小・中学生のキャンプ教室が実施されている。平成14年度も第2回目のキャンプ教室として実施された。前回同様自然体験活動をとおして教育的あるいは社会的効果をねらいとしているものである。すなわち、現在の子どもたちにとって機会が減少している直接体験をキャンププログラムの内容とし、自然の理解や共同生活の体験等により豊かな人間性を育むことを趣旨としているものである。

参加対象については、異年令間で交流ができ、ある程度自分自身の行動がとれる年令ということで小学4年生から中学1年生までとしている。

本研究は、前回と同様のプログラム内容で実施する中で、参加者の意識すなわちどの程度このキャンプに対する効果が得られたかを前回の質問紙法による結果と比較検討しながら検証し、キャンプ活動における指導の一資料とするものである。

2. 研究方法

- (1) 期 間 平成14年8月27日～30日
- (2) 対 象 小学4年～中学1年男女54名
- (3) 調査方法 質問紙法による意識調査
行動観察法

3. 結果及び考察

1) 参加者について

本キャンプの参加者の内訳については表1に示したとおりである。またプログラムについては表2に

示したようにほぼ前回と同様の内容になっている。

参加者の内訳について前回と比較すると、20名程度人数の増加が見られた。特に、小学4・5年生の参加者が増えている。男女の割合や各年齢層の比率については、若干女子の参加が増えているがほぼ同様の傾向が見られた。人数の増加については、数名昨年の参加者が見られたこと、また今回の募集にあたり前回参加者の宣伝効果といったことも一因しているのではないかと推測される。異年令間の交流による社会性の意図を踏まえれば、もう少し上級生の参加があればと考えられるが、傾向としてはほぼ前回と同じような状況であった。

表1 参加者の内訳

	小4	小5	小6	中1	計
男子	15	16	9	3	43
女子	5	4	1	1	11
計	20	20	10	4	54

2) プログラムについて

プログラムについては、表2に示したように13年度と同様の内容であるが、これは前回ほぼこちらの意図する効果が得られたのではないかという結果を基に実施したものである。

活動内容については、小規模な活動から身体的にも多少負荷のかかる大きな活動まで配慮して構成されている。それぞれの活動について参加者の興味を引くように、あるいは主催者側の意図しているところの協力して物事を遂行する社会的行動の向上といった観点からそれぞれ構成されている。活動内容の様子については前回報告したような様相で推移した。

一般にキャンププログラムの内容決定にあたって

2003. 8. 25 受理

*保健体育・スポーツ科学講座 **山形大学教育学部 ***新潟大学大学院教育学研究科

は、主催者側の目的を踏まえた上で、様々な要素に配慮することが必要となる。主なものはまず参加者の把握である。すなわち対象となる参加者の年齢、性別、経験の有無、体力水準などの考慮である。さらにカウンセラーを含めたスタッフ全体の運営組織から導かれる各プログラムのリスクマネジメントといったことへの配慮である。特にリスクマネジメントについては、いかに活動中に発生する事故やトラブルを防止するか、万が一の場合にどう対処するかといったことについて事前に充分検討しておく必要がある。リスクが含まれるプログラム活動は、一面魅力的な活動である要素もあるので、その辺のバランスをよく考慮する必要がある。活動内容によっては、専門家に指導を依頼し、安全管理には細心の注意を払う必要がある。本プログラムにおいても前回人気の高かったカヌーなどは、魅力的活動である反面、水に関する安全管理が非常に重要であるため、専門の指導者に依頼し、技術能力に応じた班別指導を実施している。

3) 参加者の動機について

キャンプ教室参加の動機の程度について示したのが表3である。項目の中には、体験や活動に対するものと、人間性や社会性に関するものが上げられている。意欲の程度の高いものを上げると体験活動に関しては、「自然の中で新しい体験をしたい」「カヌーをしてみたい」「キャンプファイヤーをしてみたい」などである。また人間性・社会性に関するものについては「家や学校では学べないことを学びたい」「新しい友達をたくさん作りたい」「1人で何でもできるようにになりたい」「誰とでも話ができるようになりたい」「責任を持って行動ができるようになりたい」「自分に自信をつけたい」「自然を大切にしたい」などである。意欲程度の高いカヌーについては、体験したことのないダイナミックな活動に対する興味の現れと前回参加者の経験からくる興味の両面含んでいると考えられる。キャンプファイヤーについても同様であると考えられる。社会性についての特徴として「友達を作りたい」という感覚と「一人で何でもできるように」といった自立する感覚が同程度のレベルにあるということである。

この結果の中で、先に示したように「自然を大切にしたい」という意欲がある一方で、「自然環境問題について考えたい」ということにはあまり積極的でない。このことは、参加者の多い小学4・5年生あたりでは、自然の大切さは認識できるが、環境問

題となると難しい感覚が作用しているのではないかと思われる。

前回の結果と比較してみると、全体として意欲的傾向の強い項目については、ほぼ同じであった。しかしながら、各項目すべてにおいて割合の増加傾向が見られた。今回は全体の人数や男女比等に違いがあるため単純に比較することはできないが、「カヌー」「キャンプファイヤー」「友達づくり」といった項目において昨年よりさらに強い意欲傾向を示した。これは、前回と同じ参加者が何名かいるため、経験を踏まえた上での意欲傾向を示したことも一因として考えられる。キャンプファイヤーについては、前回の倍近い増加傾向を示している。

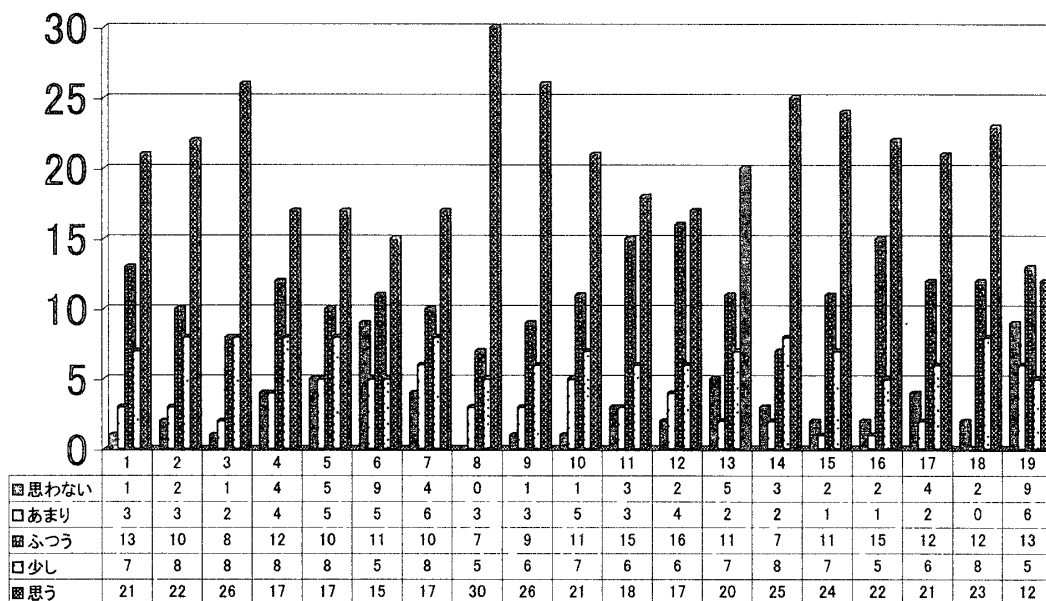
4) キャンプ教室における「楽しさ」感覚

キャンプ体験の中で主に「楽しさ」に対する感覚を示したのが表4である。楽しさ感覚の特に強い傾向は、社会性の要因の項目においては「家や学校では学べないこと」「カウンセラーやスタッフとの楽しい交流」などである。またプログラムの内容からは「自然の中でのいろいろな楽しい体験」「カヌー」「プロジェクトアドベンチャー」「ニジマスのつかみ取り」「選択プログラム」「キャンプファイヤー」など主なプログラム活動のすべてにおいて70%以上の子どもが楽しさの感覚を強くもっている。そういった点から推察すると、今回のプログラム活動は子どもの満足度という点においては成果があったものといえる。カヌー活動は参加動機における予想と一致した結果であるといえる。また、最も楽しかったものが「ニジマスのつかみ取り」ということが非常に特徴的である。表4の選択プログラムの項目の中で、最も人気が高く、子どもたちが興味を示したのが原始的な「パチンコ作りと活動」であった。二股の枝を利用してゴムを使って石を飛ばすという原始的な遊びに子どもたちは夢中になるほど興味を示した。テレビゲーム世代の子どもたちであるが、「ニジマスのつかみ取り」や「パチンコ作り」といった原始的な活動の方が自然環境の中では日常とは違った、ふだんあまり経験のない楽しさの感覚を覚えるのではないかと推察される。

キャンプ終了直後に自由記述形式で書いた感想文の中でも、一番楽しかったものが「ニジマスのつかみ取り」で一番感動したものが「キャンプファイヤー」と答えているものが最も多かった。

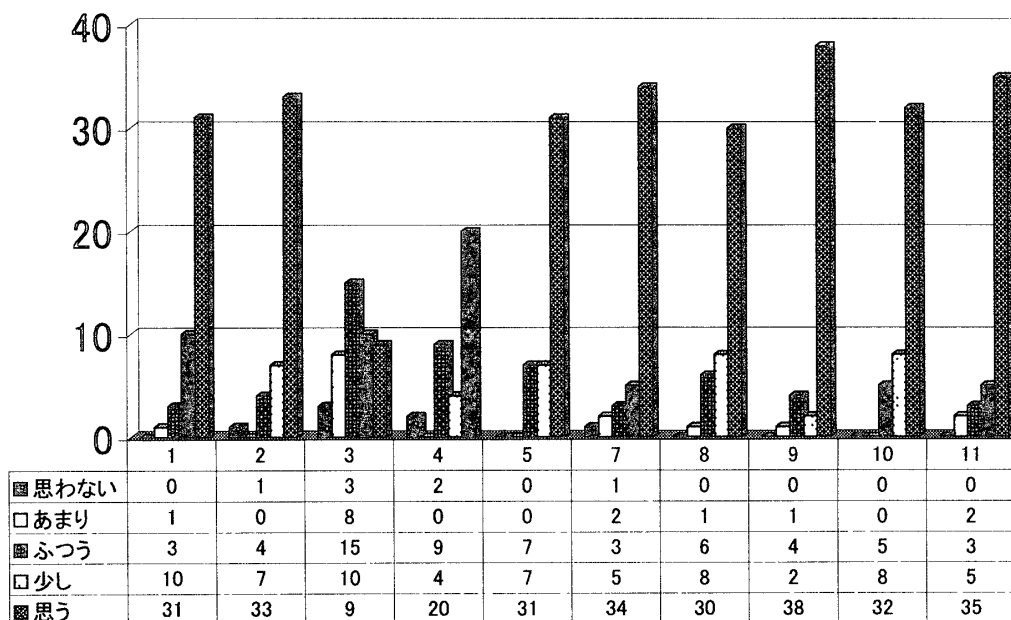
前回の結果と比較してみると、それぞれの項目において若干増加傾向が見られるが、全体の傾向はほ

表3 参加者の動機について



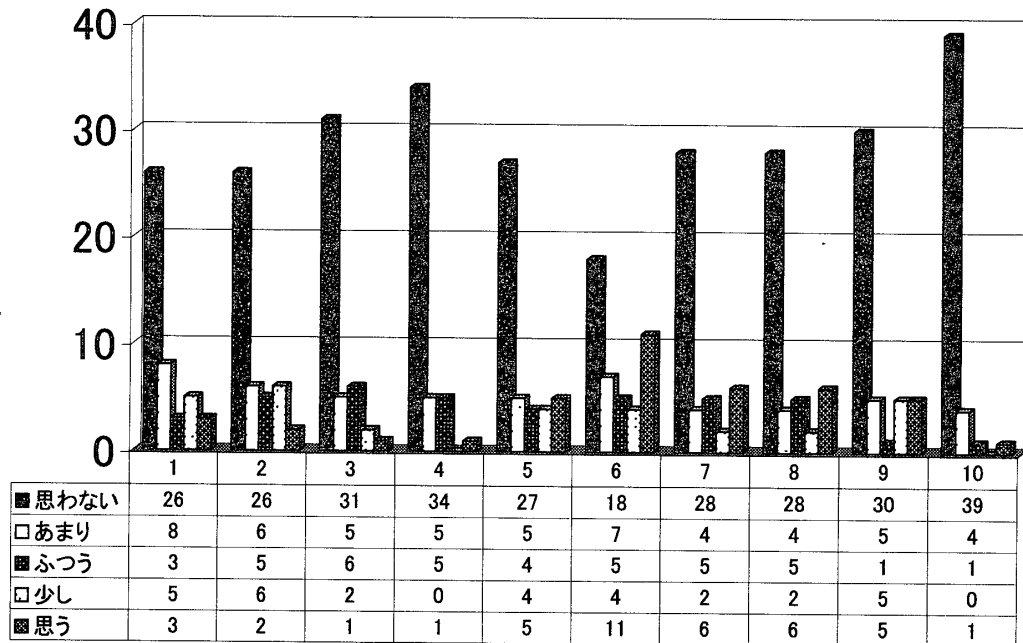
- 1 自然の中で新しい経験をしたい。 6 テントの中で寝てみたい。 11 忍耐力やしんぼう強さを身につけた! 16 責任をもって行動ができるようになりたい。
 2 家や学校では学べないことを学びたい 7 野外で料理を作りたい。 12 積極性を身につけたい。 17 自分に自信をつけたい。
 3 新しい友達をたくさんつくりたい。 8 カヌーをしてみたい。 13 集中力を身につけたい。 18 自然を大切にしたい。
 4 自分をためしてみたい。 9 キャンプファイヤーをしてみたい。 14 一人で何でもできるようになりたい。 19 自然環境問題について考えたい。
 5 たくましくなりたい。 10 キャンプの基礎知識を身につけたい 15 誰とでも話ができるようになりたい。

表4 キャンプ教室を体験して



- 1 自然の中で楽しい体験ができましたか。 7 カヌーは楽しかったですか。
 2 家や学校では学べないことを学ぶことができましたか。 8 プロジェクトアドベンチャーは楽しかったですか。
 3 集団生活はうまくいきましたか。(協力、団結など) 9 ニジマスのつかみ取りは楽しかったですか。
 4 新しい友達ができましたか。 10 選択プログラムは楽しかったですか。
 5 カウンセラーやスタッフと楽しく活動できましたか。 11 キャンプファイヤーは楽しかったですか。

表5 つらかったことは何ですか



1 家族とはなれて生活したこと。

2 集団で生活したこと。

3 野外炊飯がうまくできなかったこと。

4 自分が動かないと誰も動いてくれなかったこと。

5 テントでよく眠れなかったこと。

6 虫などに刺されたこと。

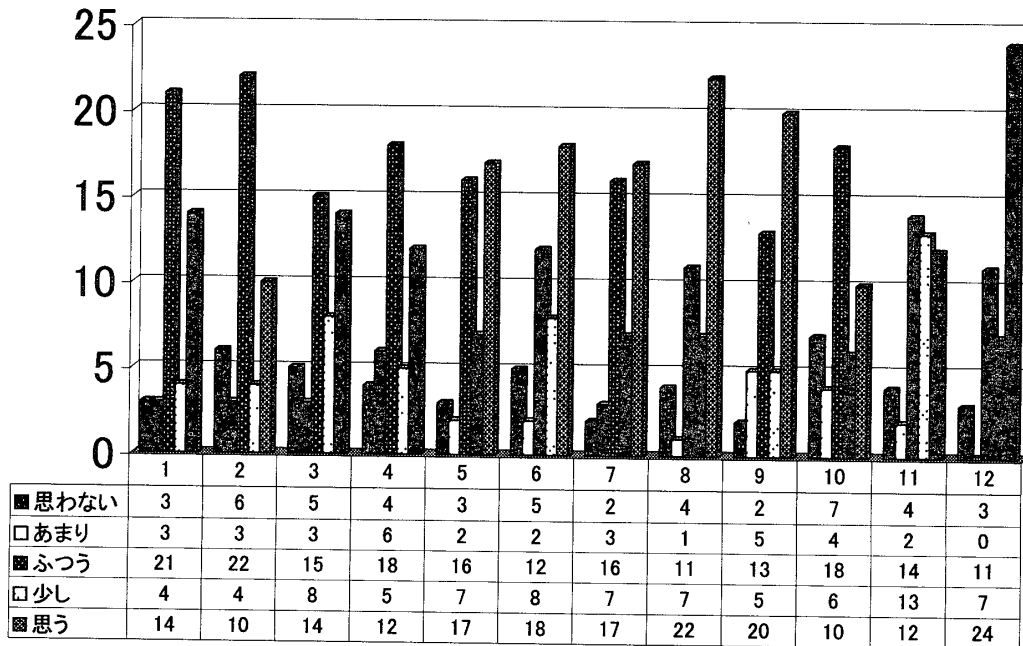
7 カヌーでよく前に進まなかったこと。

8 朝、早起きすること。

9 友達とうまくいかなかったこと。

10 カウンセラーとうまくいかなかったこと。

表6 キャンプ教室で学んだこと



1 自然に興味・関心をもつこと。

2 自分に自信がついたこと。

3 何にでもチャレンジすること。

4 一人で何でもすること。

5 誰とでも話をする事。

6 食べ物を大切にすること。

7 仲間と協力すること。

8 時間を守ること。

9 助け合うこと。

10 自然環境について考えること。

11 仕事を分担してすること。

12 キャンプ生活を楽しく過ごすこと。

ほぼ同様の傾向を示している。しかしながら「ニジマスのつかみ取り」といった原始的な活動に対する興味関心の割合が顕著に増加しているのが特徴的である。ここにおいても、2度目の参加者による楽しさの意識感覚が一因として作用していると考えられる。

5) キャンプ教室における「つらさ」感覚

キャンプ生活は、社会的な共同生活を営むため時として順応できずに苦勞する子どもが出てくる場合がある。表5は「つらさ」感覚に対する一般的なことを問いかけた場合の結果を示したものである。

本キャンプ教室の結果の場合、すべての項目において、つらさに対する負のイメージはほとんどもっていない。キャンプ活動は、気象条件の変動やトラブルによって予定通り遂行できない場合がある。本キャンプにおいては、前回同様気象条件に恵まれ、3泊4日という期間の中でほぼ予定のプログラムが消化できた。そのため子どもたちは、先に示した「楽しさ」の感覚がより強く作用し、「つらい」という負のイメージを弱めていることも一因と考えられる。しかしながら、気象条件の変動や人間関係がうまくいかない場合には当然ストレスが作用し「つらさ」感覚にも影響を及ぼすものと考えられる。

この結果で特徴的なことは「虫に刺されたこと」をつらいと答えている子どもが30%以上いることである。虫とは蚊をはじめとするちょっとしたものであるが、ふだん「虫」を遮断する生活をしているために非常に気になるようである。

前回の結果と比較すると、全体の傾向はほぼ同じであるが、負のイメージの程度が今回の方が軽減されているようである。これも経験者の参加によるものではないかと推察される。

6) キャンプ教室で学んだこと

このキャンプ教室をとおして学んだことについていくつかの項目に関して示したのが表6である。

本キャンプは野外教育的な側面も趣旨としているので、子どもたちに様々な体験をとおして学んで欲しいという意図がある。しかしながら参加者にとっては、学校と異なり「学ぶ」という意識はあまり強くないのではないかとということを踏まえて結果を認識する必要がある。すなわち、同じような内容の項目でも、参加動機や楽しさの視点から設問した場合と「学ぶ」という聞き方をした場合では意識の持ち方に違いが見られると思われる。

表6の結果より多くの項目において「学び」の意識の強さは普通程度であることがうかがえる。すなわち学ぶという意識はあまり強くはもっていないということである。そのような中で「学ぶ」意識が特に強かったのは「時間を守ること」「キャンプ生活を楽しむこと」であった。それに続いて比較的意識の強かったものは「誰とでも話をする」「食べ物を大切にすること」「助け合う」などである。「時間を守る」「助け合う」といったことは、キャンプという共同生活の中で自分がきちんとしないとどのような支障をきたすかということがかなり認識できたのではないと思われる。「食べ物を大切にすること」は、飯ごう炊飯等における調理やゴミ処理を経験する中で、そのことを理解したのではないと思われる。また「キャンプ生活を楽しむこと」については、先のプログラム内容の結果で示したように、各活動に対する楽しさの満足度が高かったために、そういった意識を強くもったものと推察される。前回の結果と比較するとこれも全体の傾向はほぼ同じであった。ただ「時間を守る」という項目については前回よりもかなり意識の強さが見られた。

先に述べたように、野外教育的側面をもつ活動を実施する場合、主催者は効果を期待して実施する。一般に野外教育に期待される効果として次のような項目が上げられる。「感性や知的好奇心を育む」「自然の理解を深める」「創造性や向上心、ものを大切にする心を育てる」「生きる力を育てる」「自主性や協調性、社会性を育てる」「諸活動の楽しみ方を学ぶ」「心身のリフレッシュや健康・体力の増進」などである。もちろんプログラムの内容をはじめとする多くの要因によってそういった効果がすべて期待できるとは限らない。また主催者が予想した効果を価値観の意識の違い等によって、必ずしも子どもたちが反応するとも限らない。しかしながら、結果としてある程度の効果をねらいながら運営を図っていくことは重要なことである。先に示した「学び」についての結果においても、子どもたちがこちらの意図する効果をどれだけ認識したのかを把握するためには、今後より詳細な調査分析が必要になると思われる。

7) 行動観察の結果から

これまで述べてきたように、各プログラムにおける個々の活動については、子どもたちの多くが楽しみながら取り組んでいることがわかる。しかしそれ以外の生活時間、すなわち自由時間やテント内生活



写真1 事前説明会



写真2 プロジェクトアドベンチャー（ジャイアントシーソー）



写真3 夕食風景



写真4 カヌー練習



写真5 ニジマスつかみ



写真6 キャンプ場にて

などの場面においては、生活上の問題が生じる場合がある。本キャンプ教室は、縦割りの班編制の基に各班に大学生カウンセラーを配置している。すなわち、問題行動が生じたときに、カウンセラーの指導によってより円滑な班生活が運営できるようにするものである。カウンセラーの班内行動観察あるいはキャンプディレクターの全体行動観察によって、時として生活上の問題が生じていることが見受けられる。本キャンプにおいても、自由時間やテントでの生活の中で「わがまま」「自分勝手」「ひとりよがり」といった子どもとによく見受けられる行動を示すものが時として若干見受けられた。そういった社会的適応の問題は、指導によってすぐ変容するものから性格も含めて指導がかなり困難なものまで様々なケースがある。本キャンプにおいては、各班のカウンセラーの指導や全体を統括しているキャンプディレクターの指導によって運営に支障をきたすような状態は生じなかったものの、カウンセラーの指導を受ける子は若干名見受けられた。本キャンプ教室のように集団生活で実施する場合、子どもたちの社会適応といった問題について、事前に解決の方法を検討しておく必要がある。しかしながら、実際現場で生じてくる様々な現象は、状況判断によってよりよい方向へ解決していかなければならない部分が多分にある。問題が生じた際には、キャンプカウンセラーやキャンプディレクターの連携によってより適切な方向へ導く必要がある。

5. まとめ

- 1) 本キャンプにおける子どもたちの意識調査の結果は、前回と比較した場合、全体としてはほぼ同様の傾向を示した。
- 2) 子どもたちの本キャンプ活動に参加する際の動

機は、「学ぶ」という感覚よりは「やってみたい」「楽しみたい」という感覚が強かったといえる。しかし、そういった感覚が「学ぶ」ということに連動している側面が多分にあることが推察できる。

- 3) 参加動機や楽しさの感覚においては、前回参加した経験者の影響が示唆された。
- 4) 本キャンプ教室における子どもたちの意識調査の結果から、今回の運営目標は、ほぼ達成できたと考えられる。

参考文献

- 1) 「長期キャンプにおけるプログラムの検討」大橋正春 新潟大学教育学部紀要 第32巻 第2号 1991
- 2) 「キャンプカウンセラーと子どもの関係がキャンプに及ぼす影響について」菅原健雄, 大橋正春 新潟体育学研究 第15巻 1996
- 3) 「キャンプ参加者の意識について」菅原健雄, 大橋正春, 本間雅美 新潟体育学研究 第16巻 1998
- 4) 「改訂 キャンプテキスト」日本野外教育研究会編 杏林書院 1999
- 5) 「長期自然体験活動におけるプログラムの検討」大橋正春, 菅原健雄 新潟大学教育人間科学部紀要 第3巻 第2号 2001
- 6) 「野外活動 その考え方と実際」日本野外教育研究会編 杏林書院 2001
- 7) 「小・中学生のキャンプ体験に関する研究」—新潟大学公開講座の事例から— 大橋正春, 長井健二, 井上一生 新潟大学教育人間科学部紀要 第4巻 第2号 2002